

上海辞書出版社《唐詩鑑賞辞典》訳注稿 ——李商隱篇(14)——

門 脇 廣 文

Commentary on the Four Poems of Li Shang-yin in
the *Tang-shi jian-shang ci-dian*(Dictionary for the
Appreciation of the Tang Poems. Published by the Shang-
hai Dictionary publication Company)
—A Draft Translation with Annotations

Hirofumi KADOWAKI

[目次]

はじめに

[53] 楚宮	王思宇
[54] 晚晴	劉学鍇
[55] 安定城樓	黄清士
[56] 天涯	宋廓

はじめに

昨年度(2005年度)にひきつづき、上海辞書出版社《唐詩鑑賞辞典》所収の李商隱詩についての賞析文の訳注稿四篇を公表する。現在のメンバーは大東文化大学文学部非常勤講師の三枝秀子、学部卒業生の関久美子(現在、東京学芸大学教育学部非常勤講師)、後藤庸介、大学院博士課程後期課程3年の宮下聖俊、秋谷幸治、1年の鈴木拓也、博士課程前期課程1年の葉山恭江、そして私(門脇)の8名である。現在、[73]曲江の翻訳を行なっている。なお、今回の担当者は次の通り。

[53] 楚宮	秋谷幸治
[54] 晚晴	宮下聖俊
[55] 安定城樓	関久美子
[56] 天涯	三枝秀子

楚宮

湘波如淚色漻漻

楚厲迷魂逐恨遙

楓樹夜猿愁自斷

女蘿山鬼語相邀

空歸腐敗猶難復

更困腥臊豈易招

但使故鄉三戸在

彩絲誰惜懼長蛟

楚宮

湘波は涙の如く色^{りょうりょう}漻漻楚厲^{それい}迷魂 恨みを逐ひて遙かなり楓樹^{ふうじゆ}夜猿^{やえん} 愁ひは自ら断ち、女蘿^{じよら}山鬼 語相ひ邀^{もと}む

空しく腐敗に帰せば 猶ほ復し難く

更に^{せいそう}腥臊に困せば 豈に招き易からんや

但だ故郷に 三戸 在らしめれば

彩絲^{さいし} 誰か惜しまん 長蛟^{ちやうこう}を懼れしむるを

この詩の歴史的背景や、寓意に関して、注釈者の見解はまちまちである。近代の注釈者である張采田⁽¹⁾は、この詩は、太中二年(848)に詩人が、桂州(今の広西・桂林)にある鄭重⁽²⁾の幕府から長安に戻る途中、潭州(今の湖南・長沙)のあたりを通った時に作ったものであるとしている。そしてこの詩は、もっぱら屈原を悼んでいて、その他に意味するところはないとしている。この張采田の説によるのが、妥当であろう。

李商隱は一生、政治の面では、まったくうまくいかず、かれの人生はとても不遇なものであった。だからこの詩は屈原を悼んでいると同時に、当時の政治世界や、自身の境遇に対する感慨もとけこませていると言える。

1

この詩は、屈原を悼むその他の詩とは異なり、屈原の人がらや才能、そしてかれが政治的に不遇であったという面からは、書き始めてはいない。この詩は、始めから終わりまで、屈原の「さまよう魂(迷魂)」を中心にすえて、描写しているのである。

首聯(湘波如淚色漻漻 楚厲迷魂逐恨遙)では、屈原の「さまよう魂(迷魂)」が波に流されてゆき、尽きることのない恨みを抱いているようすを描いている。

頷聯(楓樹夜猿愁自斷、女蘿山鬼語相邀)では「さまよう魂(迷魂)」が長い夜、よるべもなく、限りなくさびしいようすを描写している。

頸聯(空歸腐敗猶難復、更困腥臊豈易招)では「さまよう魂(迷魂)」を呼び戻すことが、容易ではないことを嘆いている。

尾聯(但使故郷三戸在、彩絲誰惜懼長蛟)では「さまよう魂(迷魂)」が、最終的には慰められることをたたえている。

このように「さまよう魂（迷魂）」のことをめぐって詩の構想が練られており、歌われている内容が一点にしばられている。そしてそれがさまざまな方向や角度から、何度も重ねて描かれているのである。それによって、くり返しにより長く余韻を残す、そのようなおもむきが詩に備わっているのである。

2

詩のはじめの四句（湘波如淚色漻漻、楚厲迷魂逐恨遙、楓樹夜猿愁自斷、女蘿山鬼語相邀）は、景物を用いて詩人の思いを描いている。屈原は忠臣であつたけれども疑いをかけられ、湘江に身を投じて祖国に殉じた。この詩も目の前に見えるその湘江から「湘波 涙の如く色漻漻 楚厲の迷魂 恨みを逐ひて遥かなり」と筆をおこしている。

「漻漻（遼 liao と同じ発音）」とは、川の清らかで澄み切ったさまを言う。むかしの迷信によると、帰るところのない幽霊を「厲」という。「楚厲」とは、無実の罪で死んだ屈原の、帰るところのない魂を指す。詩人は、湘江を目の前にしながら、屈原の不幸を思い出し、ひたすら屈原を悼んだ。

詩人の目には、次のように映っている。清らかで澄み切った湘江の波は、すべてなみだがたまって出来上がったものである。その「涙」は、屈原が国を憂え、人民を憂えて流したなみだである。また後世のものが、屈原を悼んで流したなみだである。さらに詩人がこの時に心を傷めて流したなみだでもある。湘江には尽きることないなみだが流れ続け、そのうえずっと屈原を悼み続けている。さらに、そのなみだのような波の中に、あたかも屈原の「さまよう魂（迷魂）」が見えたかのように詩人は描いている。

「恨みを逐ひて遥かなり」とは、「さまよう魂（迷魂）」が、あふれんばかりの悲しみと怒りを内に含んで波にただよい、遠くに流されて行くようすを描いている。そして湘江の川の流れが尽きない間は、屈原の「さまよう魂（迷魂）」も永遠にその流れを追い続け、その恨みもまた千年万年たっても、永久に消える時がないということを描いているのである。

「恨」の字と「涙」の字とには、詩人の強い思いがとけこんでいる。ここには屈原の深い悲しみに対して哀悼の気持ちが表されているだけではなく、屈原を悲劇に追いやってしまった楚の国の統治者に対する厳しい非難も、こめられているのである。

3

頷聯（楓樹夜猿愁自斷、女蘿山鬼語相邀）では、さらに湘江の岸辺の景物という視点から、詩の主題をよりはっきり際だたせている。この聯では、《楚辞》招魂、屈原の〈九歌・山鬼〉の次のような句の内容をアレンジして使っている。

湛湛江水兮 上有楓 湛湛たる江水 上に楓有り
目極千里兮 傷春傷 目は千里を極め 春心を傷めしむ

湛え満ちた大川の水、その上には楓樹が茂る。はるか遠く目の届く限りを眺めていると、春

の心を傷ませる。

《楚辞》招魂

若有人兮山之阿、被薜荔兮帶女羅 人冇るが若し 山の阿くまに 薜荔きを被て 女羅を帶ぶ

だれか山かげにいるようだ。薜荔マサノキカズラの衣を着て、女羅ヒカゲノカズラの帯をしめて

猿啾啾兮猱夜鳴 風颯颯兮木蕭蕭 猿は啾啾たり 猱は夜鳴き 風は颯颯 木は蕭蕭

猿たちは悲しい声で夜の闇の中で鳴いている。風が吹いて木々は騒がしくざわめいている。

《楚辞》九歌・山鬼

「楓樹夜猿」とは、霜のおりた楓の樹と、さびしい鳴き声あげる猿のことである。それによりさむぎむしい秋の夜を描いた、一つの場面を作りあげている。

「愁」は、猿の愁いであると同時に「さまよう魂(迷魂)」の愁いでもある。そしてこの猿の愁いは、「さまよう魂(迷魂)」の愁いをいっそう深めているのである。「断」とは、断腸の思いだということである。

次の句の「女蘿山鬼」とは、「ヒカゲノカズラ(女蘿)」を帯にしている「山の幽霊(山鬼)」のことである。「語相もとひ邀む」とは「山の幽霊(山鬼)」が、たがいの魂を呼び合っていることである。それと同時に、「山の幽霊(山鬼)」たちが、屈原の「さまよう魂(迷魂)」を呼んでいることをも指している。その境地は、不気味で陰鬱なものである。

果てしなく長い夜、うっそうと茂る楓の木陰、その中で「さまよう魂(迷魂)」はよるべもなく、ただ「夜に鳴く猿(夜猿)」と、「山のかみさま(山鬼)」とを相手にするしかない。この聯に描かれている光景は傷ましげで、悲しい思いは海のように深く、この詩を読む人に、この上ない悲哀の情を抱かせる。

4

次の四句は議論しているようであるし、また嘆いているようでもあり、また議論しながら嘆いているようもあるが、いずれも詩人の心の内にある感嘆を表現しているのである。五、六句で言っていることは次のようなことである。

たとえ屈原が死んだ後、地下に埋められているとしても、そのしかばねは、空しく腐ってしまうはずなので、魂も招き寄せることは難しい。ましてや川に身を投げて死に、しかばねが生臭い魚やエビなどの間に横たえているならば、彼の「さまよう魂(迷魂)」を招き寄せることは、いっそう難しくなる。「復」と「招」は同じ意味であり、これらはともに死者の魂を呼び戻すという意味である。

以上の三つの聯は、ともに悲しみの気持ちを描写したものである。けれども末聯では、おもむきががらっと変わる。悲しく婉曲なかんじから、激しく昂揚したかんじになり、屈原の忠義あふれる魂を高らかに歌いあげることによって、詩をしめくくっている。

この聯では《史記》項羽本紀の「楚はわずかに三戸の民家に滅っても、秦を滅ぼすのは楚だろう」⁽³⁾という典故、そして《続斎諧記》に載っている楚の人が屈原を祭るという言い伝えとを、一緒にまとめて用いている。⁽⁴⁾ この聯で言っていることは次のようなことである。

楚の人が子孫を絶やしさえしなければ、彼らは五色のひもや、シュロやクマザサを使って供物を包

んで屈原を祭り、この偉大な愛国詩人を永遠に忘れないに違いない。

5

この〈楚宮〉という詩は、《楚辞》や屈原自身が書いた作品の中で使われていることばと、そこに描かれている詩の世界とを変形させて、詩のなかにくみ入れている。だけれども、そのような痕跡は一切残しておらず、読むとそれは李商隠自身のことばのようで、かれ独自の風格が感じられる。

またこの〈楚宮〉という詩は、景物を描くことによって詩人の思いを述べ、感嘆することによって自らの主張をし、この詩を始めから終わりまで、叙情的な雰囲気を中心に押しだしているものになっている。そして内容の面でも、くり返し詠嘆しているという特徴を加えているのである。それらのことによって、この詩を「婉曲で曲折で、人々を深く感動させる」ものになっていると翁方綱氏が《石洲詩話》で指摘するように、われわれはこの詩に強く心を動かされるのである。

王思宇（秋谷幸治訳）

-
- (1) 張采田：既出。
 - (2) 鄭垂：唐、荊陽の人。字は子佐。元和の進士。官は給事中、桂管觀察使。吳湘の獄に坐し、循州刺史に貶せられ卒す。
 - (3) 《史記》項羽本紀の：居鄴人范增、年七十、素居家、好奇計、往説項梁曰、「陳勝敗固当、夫秦滅六国、楚最無罪、自懷王入秦不反、楚人憐之至今、故楚南公曰『楚雖三戸、亡秦必楚』也。
 - (4) 【原注】《続斎諧記》の記載によると、屈原は五月五日に汨羅江に身を投じて死んだ。楚の人たちは、毎年この日になると、竹筒に米を入れ、それを川の中に投じて祭った。漢の時代、長沙のある人が、昼間に突然、自ら三閭大夫（屈原が自分のことを指していることば。三閭大夫とは彼の官職名である）と名乗る人物に出逢った。かれが言うには「毎年いただいている供物は、すべてみずちにとられてしまっています。あなたが、今私に供物を下さるというのであれば、センダンの葉で上面をふさいで、それを五色のひもで縛ってください。この二つのものにみずちは恐れをなすのです」

晚 晴	晚 晴
深 居 俯 夾 城	深 居 夾 城 ^{みおろ} を 俯 し
春 去 夏 猶 清	春 去 り て 夏 猶 ほ 清 し
天 意 憐 幽 草	天 意 幽 草 を 憐 れ み
人 間 重 晚 晴	人 間 晚 晴 を 重 ん ず
併 添 高 閣 迴	併 び 添 ふ 高 閣 ^{はる} 迴 か
微 注 小 窗 明	微 かに 注 ぐ 小 窗 の 明 かり
越 鳥 巢 乾 後	越 鳥 巢 乾 きて 後
帰 飛 体 更 輕	帰 り 飛 ぶ 体 は 更 に 輕 し

「晚晴（夕方になって晴れること）」の景色や物をきめ細やかに描写しただけなら、それほど難しいものでは無いのかもしれない。ただ、もしも景色や物を描写している中に李商隠独特の感じ取り方や心境をとけ込ませるならば、その中でも特に、ある種の積極的な人生の態度を痕跡を残さずに含み込ませて、読者に考え方において示唆を感じ取らせようとするならば、李商隠はその思想的な境地と表現力のどちらにおいても、もう一段上の工夫⁽¹⁾が必要になる。

1

首聯（深居俯夾城 春去夏猶清）では、自分の居るところが辺鄙なところであり、「夾城」（城門の外にある小さい城郭）を下に見おろしているということ、また、季節はまさにさわやかな初夏であるということを行っている。

これらは、さっと目を通したばかりではまるで題名とつながりがないように見えるし、第一句と第二句にも、前後のつながりがないように見える。しかし実際には、「夾城^{みおろ}を俯（俯夾城）」しているその「深^{すまい}居（深居）」は、雨上がりの夕方の景色を眺めやっている、その立っている場所なのである。そして、さわやかな初夏であるということも、その「晚晴」がどの季節であるのかということをはっきりとさせている。このように、時間と場所というふたつの面から、詩の題名を具体的にあらわしていると言っても差し支えないのである。初夏に、高いところで眺めやっているのは、雨上がりの夕方の景色（「晚晴」）なのだ、と。

2

初夏には雨が多い。それが嶺南地方⁽²⁾ならなおさらのことである（このとき李商隠は桂林の鄭亜

の幕府に職を得ていた)。

長く降り続いていた雨がにわかにあがり、夕方の雲間から陽の光が差し込んだ。すべての物がたちまち輝きを増していくように感じられ、人のこころもぱっとすがすがしくなる。このような光景や感じ方は、もともと普通の人がよく見かけたり、共通に持ち合わせているものである。ここで李商隠が他と違うところは、夕方の晴れ間の景色をうわべだけ描いているのでもなければ、こまごまとした描写をするのでもない。うす暗いところに生えて人に気づかれないような小さな草(「幽草」)をただ取り上げるだけで、一見関係ないところを描いているようだけれども、そのことによってひそかに「晚晴」を喩えているところである。さらに言えば、李商隠が「晚晴」を見て心に感じた、格別な感慨を描いているところである。

長く降り続いた雨によって苦しめられていた「幽草」が、不意に「晚晴」にあい、夕陽を浴びることによって生気を増している。李商隠はこの情景に触れて興がわき、ふっと「天意 幽草を憐れむ(天意憐幽草)」という非凡な発想が生まれた。この句は自然に生えている「幽草」を、無意識のうちに人格化させることで、読者に豊かな連想をもたらすのである。

李商隠自身が同じような運命を持っているので、「幽草」に、ごく自然に自分の姿を重ねてしまうのである。ここには李商隠の、自分の身の上に対する感慨が込められている。彼は目の前にめぐってきた幸福によって心が安らいでいる。だが同時に、過去の不幸に対する悲しみが思わずあふれてくるのである。あるいは、過去の悪いめぐりあわせがあるからこそ、目の前の幸福なめぐりあわせに、なおいっそう心が安らぐのだと言えるかもしれない。

このことは自然に「人間 晚晴を重んず(人間重晚晴)」という句を引き出す。そのうえ「晚晴」に、人が生きる上での特別な意味を与えている。

「晚晴」は美しい、しかしそれは短い。人々はいつも、それを賞賛して名残を惜しむのと同時に、「晚晴」が慌ただしく過ぎ去ってしまうことに対して、哀惜し茫然たる思いをもつのである。

しかしながら、李商隠は「晚晴」の短さを気にしているわけでは決してない。ただ「晚晴を重んず(重晚晴)」と強調するだけである。このことから、次に挙げることもまでも味わうことができる。それは、すばらしいけれどすぐに過ぎ去ってしまうものを、非常に大切にするという李商隠の感情であり、また、積極的で楽観的な人生の態度である。

3

頷聯(天意憐幽草 人間重晚晴)の書きぶりは、様々なものが混ざり合い概括的であり、その中に深く込められた意味があった。

しかし、次の頸聯(併添高閣迥 微注小窗明)ではうってかわって、「晚晴」に対して精巧で細やかな描写がなされている。このように虚の部分と実の部分、疎の部分と密の部分とが前後していることで、詩には緩急のあるおもむきがあらわれ、平板にならず、単調にならないのである。

雨上がりの「晩晴」、すっかり晴れ渡り、高いところから眺めやれば、視線はさらにはるか遠くへと向けられる。だから「並び添ひて 高閣 廻か（併添高閣廻）」と言うのである（ここで言う「高閣」とは詩人が居る樓閣のことである）。この一句は、側面から「晩晴」を描いている。情景の描き方が、内から外に向かっているのである。それとは逆に、次の句（微注小窗明）は正面から「晩晴」を描いている。情景の描き方が、外から内に向かっているのである。夕陽の余光が小さな窗から注ぎ込み、ひとすじの光明をもたらす。

夕方の太陽であるため、その光が弱々しく穏やかであるから、「微かに注ぐ（微注）」と言うのである。たしかに「微かに注ぐ（微注）」ような光だけでも、それでもこの陽の光は人に喜びと安らぎをもたらすのである。

この頸聯では、夕暮れの情景を具体的に描くことで、明るく喜んでいる心境を描写し、「重んず（重）」という言葉の意味を具体的に述べているのだ。

4

尾聯（越鳥巢乾後 帰飛体更輕）では、飛ぶ鳥が巢に帰る際の、その様子の軽やかさを描いている。引き続き高いところから眺めやって、そこから見たものを描いているのである。

「巢 乾く（巢乾）」と「体 輕し（体輕）」は「晴」という状況にぴったりと合い、「帰り飛ぶ（帰飛）」は「晩」という状況にぴったり合う。自分の巢に鳥が「帰り飛ぶ（帰飛）」姿というのは、ふつうなら旅人の旅愁を呼び起こすものである。ところがここでは、晴れたことを喜ぶ、その気持ちを引き立たせるのである。

「古詩」の中に「越鳥 南枝に巢くう（越鳥巢南枝）」という句がある⁽³⁾。この「晩晴」に描かれている「越鳥」が巢に帰る姿には、李商隱自身の姿が込められている。もしも「幽草」というのが李商隱の「賤しきに淪みしず虞おそれになや艱む（淪賤艱虞）」⁽⁴⁾という身の上の象徴であるというのなら、それなら「越鳥」も、まるで目の前に身を寄せる場所があることで、気持ちを高揚させている李商隱の姿といえるようだ。

5

ここで、李商隱が桂林の鄭畵の幕府に入る前後の状況について、少し説明しなければなるまい。

李商隱は、開成三(838)年に涇原節度使の王茂元(李党と見なされている)に婿入りした。するとすぐ、そのことから党派の争いの狭間に入り込んでしまい、牛党からずっと恨まれたり排斥を受けたりしていた。

宣宗が位を継承して即位すると、牛党が朝廷の権勢を握ってしまい、形勢はますます李商隱に対して不利になった。李商隱は長安を離れるよりほかに、鄭畵に付き従い桂林でその幕僚となった。

鄭畵は李商隱を比較的信頼しており、その幕府の中ではいくらか人情の温かみを感じることができた。それと同時に、長安における党派の争いの渦から離れることで、それまでは常に受けていた牛党

の白眼視をしばらくは免れることができた。そのことから、精神的にもある種の解放感があつたのである。

まさにこのような状況だったからこそ、この「晚晴」詩には、「幽草」が幸運にも「晚晴」にめぐりあったり、「越鳥」が喜んで「乾」いた「巢」に「帰」という感情が込められたのである。

6

そこに含み込められた意味がある詩だと見なせば、この「晚晴」詩の描写の手法は、ますます「有意無意の間に在（在有意無意之間）⁽⁵⁾」る「興」に近づいている。

李商隱には、もしかしたら事物に自分の志を込めようとする明確な意図は、もともとは無かったかもしれない。ただ高いところに登って遙かに見渡したときに、ちょうど物と接することで連想が触発されて、情と境とが一緒になっただけなのかもしれない。それゆえに、その刹那に心を感じた李商隱独特の感覚は、雨上がりの夕方の景色を描写するそのなかにとけこんでいるので、特別自然に渾然一体となっており、その痕跡を残していないのである。

劉学鍇（宮下聖俊訳）

-
- (1) もう一段上の工夫：原文では「更に上る一層の楼（更上一層楼）」を慣用句としてここに用いている。この句は、王之涣の〈登鶴雀楼〉詩の句である。全文は「白日依山尽、黄河入海流。欲窮千里目、更上一層楼」。この詩はあるいは朱斌の〈登楼〉として《全唐詩》に収録されている。
- (2) 嶺南地方：五嶺の南の地のことで、広東・広西省一帯のことを指す。五嶺とは大庾嶺・始安嶺・臨賀嶺・桂陽嶺・揭陽嶺のことである。
- (3) 「古詩」の中に「越鳥巢南枝」という句がある：〈古詩十九首〉其の一に「胡馬北風に依り、越鳥南枝に巢く（胡馬依北風、越鳥巢南枝）」とある。北方の胡で生まれた馬は、どこにいても北から吹く風を懐かしみ、南方の越で生まれた鳥は、どこにいても故郷を懐かしみ南側の枝に巢を作る。このように、故郷を恋しがる気持ちを喩えている。
- (4) 「淪賤艱虞」：李商隱の詩〈安平公〉に「古人常歎知己少、況我冷賤艱虞多」という句が見える。
- (5) 「在有意無意之間」：《世說新語》の文学第四の七十五番目にある言葉。文康が「もし意に邪があれば文学作品として描き出しきれないが、もし意に邪がなければ、いったい何を文学作品として描き出すというのか（若有意邪、非賦之所尽。若無意邪、復何所賦。）」と問うのに、庾子嵩が答えて「まさに有意と無意の間に在るのだよ（正在有意無意之間）」と言ったのである。

安定城楼

迢递高城百尺楼

緑楊枝外尽汀洲

賈生年少虚垂涕

王粲春来更遠游

永憶江湖帰白髪

欲回天地入扁舟

不知腐鼠成滋味

猜意鵩鷃竟未休

安定城楼

迢递たる高城 百尺の楼

緑楊の枝外 汀洲に尽く

賈生 年少くして 虚しく^{なみだ}涕を垂れ

王粲 春来りて 更に遠游す

^{としへ}永に江湖を^{おも}憶ひて 白髪に帰し天地を^{めぐ}回らさんと欲して 扁舟に入る

腐鼠の滋味を成すを知らざるも

意を猜ふ^{うたが} 鵩鷃^{あんすう}の^{つい}竟に未だ休まざるを

「安定」とは、涇州（今の甘肅省涇川県の北）のことである。唐代では涇原節度使の管轄下にあった。唐・文宗の大和九年（835）、王茂元⁽¹⁾が涇原節度使になると、開成三年（838）、李商隱は王茂元に招かれて幕下に入り、さらにはその娘婿となる。その後まもなく、李商隱は博学宏詞の試験を受けるが、及第せず涇州に帰った⁽²⁾。そのとき城壁の望楼に登り、感じるころがあつてこの詩を作り、心の憂さを晴らさんとしたのである。

1

はじめの二句（迢递高城百尺楼、緑楊枝外尽汀洲）は、望楼に登った際に目にした景色である。

高くそびえること百尺といわれる安定の城壁の望楼に登れば

遙か遠く、柳の緑の下に広がる沼の中州が目飛び込んでくる

涇州城の東には「善女湫」という沼が数里にわたって広がっていたといい（《太平広記》に見える）⁽³⁾、詩中の「汀洲（沼の中州）」は、それを指していると考えられる。

最も高い望楼に登り、最も遠いところを望めば、視界はどこまでも開け、実に壮観である。このような景色に触れたからこそ詩情が湧いたのであって、以下の六句に詠まれている気概や大いなる志、尽きることのない感慨といったものは、すべてここから生まれたのである。

三・四句目（賈生年少虚垂涕、王粲春来更遠游）では、まず二人の古人の姿に自らを重ねている。賈誼（賈生）⁽⁴⁾が策を献じ、王粲⁽⁵⁾が賦を作った⁽⁶⁾。当時は、いずれもこの詩を作った李商隱と同じくらいの若さであった⁽⁷⁾。

賈誼が〈治安策〉を上奏しても漢の文帝に取りあげてもらえなかったのは、〈治安策〉の冒頭に「臣竊かに事勢を^{おも}惟ふに、痛哭を為すべき者一あり（私が竊かに世の情勢について考えますに、痛哭すべ

き点が一つあります)」という文言があったためである⁽⁸⁾。それゆえ、この詩では「虚垂涕（むなしく涙を流す）」と言うのである。李商隱も博学宏詞の試験を受けたが落第した。その心の内は、賈誼が上奏して採択されなかったときと同様、あれこれ思い悩み、鬱々としていたのである。

一方、王粲は戦乱を避けて荊州に赴き、劉表のもとに身を寄せた⁽⁹⁾。李商隱も涇州に赴いて王茂元の幕下に入った。ともに人のもとに身を寄せて庇護を受けていたのである。

このように、ここでは二人の古人にまつわる故事を用いて、自らの当時の立場や心情をそれになぞらえているのである。喩えとしては、まさにうってつけといえよう。

以上が、この詩の第一段である。

五・六句目（永憶江湖帰白髪、欲回天地入扁舟）では、自らの志や抱負を述べている。李商隱の身の上は恵まれたものではなかったが、その大いなる志は、いまだ少しも失われていなかった。

「江湖（川と湖。朝廷に対して、地方や田舎の喩え）」や「扁舟（小舟）」は、春秋時代の范蠡⁽¹⁰⁾の故事をふまえたものである。范蠡は越王・勾踐^{こうせん}を補佐して「会稽の耻を雪ぐ⁽¹¹⁾」という目的を果たすと、その後は「扁舟に乗って、江湖に浮かぶ」生活を送ったという（《史記》貨殖列伝に見える）⁽¹²⁾。つまり、

自分には田舎に帰って隠遁したいという気持ちがかねてからある

だが、まずは天下を揺るがし、世の中をひっくり返すような大事を成し遂げ、そのうえで、白髪をたたえ小舟に身をゆだねよう

と、この二句では言っているのである。

「永に江湖を憶ふ（永憶江湖）」とは、名利にこだわらない気持ちがあることを意味する。一方、「天地を回らさんと欲す（欲回天地）」とは、功績を立てたいという志のあることをあらわしている。両者は相反することのように見えて、実はともに成り立つ。なぜなら、「永に江湖を憶ふ」意向がなければ、名利を追い求めることしか頭にない役人となり、「天地を回らさんと欲す」という遠大な夢を抱くはずもないからである。ここでは、「永」という文字が実に効果的に用いられている。この「永」字が、詩人が生涯抱き続けた志を雄弁に物語っているのである。

この二句は、洒脱であり、また力強くもある。清代の査慎行は、「王半山（安石）⁽¹³⁾はこの聯を最も高く評価し、細かいところまで味わえば、杜甫の詩の趣が大い感じられるという⁽¹⁴⁾」（《査初白十二種詩評》）と記している。詩の表現形式の面から見れば、ことばをしっかりと配置し、そこに余情を凝集させるなど、その技法は、もとより杜甫の詩に近いと言える。だが、ここでより注目すべきは、封建社会における才能や志ある人士の前向きな思想や向上心を、この二句が反映していることである。恬淡たる心を持ちながら、国の大事を背負って立つとの気概も持ちあわせていることが、この二句からは伝わってくる。そして、それは杜甫が胸に抱いていた思いと酷似している。また王安石も、この二句の向こうに自らの姿を見たからこそ、称賛しているのである。

以上が、この詩の第二段である。

七・八句目（不知腐鼠成滋味、猜意鵷鷺竟未休）は、莊子の寓話を借りて、何の役にも立たない自

らの功名や俸禄をあらわし、むやみな憶測はしないでほしいと言っているのである。

莊子の寓話は、次のようなものである。

恵施が梁の宰相であったとき、莊子に宰相の座を奪われることを恐れ、あれこれ手を尽くして警戒し、抜かりはないかと心配していた。そこで莊子は恵施のもとに出向き、恵施に向かって率直に言った。「鵷鵠（伝説中の鳳凰と同類の鳥。莊子は自らを喩えている）は、竹の実でなければ食べず、甘泉の水でなければ飲みません。だから、鷃（ふくろう。恵施を喩えている）が捕まえた腐った鼠（宰相の座を喩えている）をおいしそうだと、うらやましがることなどありません。」と⁽¹⁵⁾。《莊子》秋水篇に見える）

つまり、あなたの地位に対して私はまったく興味がないのに、あなたは要らぬ心配をして、自分ひとりで騒いでいると、莊子は言っているのである。

七・八句の二句は、自分には損得にとらわれる私心や雑念がなく、公明正大で、淡々として穏やかな心の持ち主であることを明示しており、先の「永に江湖を憶ふ（永憶江湖）」という句の強力な裏付けとなっている。また、世の中のすべての汚れた事物を蔑視し、決して妥協しないことをもあらわしている。さらには、権力や地位にしがみつき手放そうとしない輩を痛烈に批判し、彼らに対する嘲笑や皮肉の限りを尽している。

近人の張采田の《玉溪生年譜会箋》によれば、李商隱が博学宏詞の試験に落ちたのは、牛党の横やりが入ったためという⁽¹⁶⁾。そうだとすれば、この二句はより具体的な内容をもったものとなる。

以上が、この詩の第三段である。

2

この詩は、力強く風骨があって、揺るぎない構成でありながら、文脈が柔軟に変化する。なかでも、その典故の使い方は実に秀逸である。

まず、賈誼や王粲の境遇と作者自身との共通点の中から、似たような典型的事例をしつかりと見いだしている。賈生が涙を流し、王粲が放浪していた時の心情を、李商隱は自らが時代を憂えたり異郷に身を寄せている時の気持ちに、ぴたりと重ねあわせている。しかも、何かを成さんと発奮しながらも抑圧を受けている若き志士の姿を、作品の中に生き生きと描き出しているのである。

次に、作者の複雑な胸の内はそもそも短いことばでは表現できないのだが、ここでは莊子の寓話にそれを託すのである。そして、李商隱が名利を求めて汲々とする狷介な人物ではないことを十分に伝えるだけでなく、あらゆるものを冷ややかなまなざしで見つめるその姿勢をも反映させている。さらには、政敵の悪意や中傷に反撃さえしているのである。

以上のように典故を用いることで、生き生きとかつ的確に、含蓄豊かにかつまた鋭く、典故の効果を余すところなく発揮させているのである。

黄清士（関久美子訳）

-
- (1) 王茂元：(?-834) 既出。
 - (2) 李商隱は王茂元に招かれて幕下に入り…及第せず涇州に帰った：李商隱の涇州入幕・結婚と博学宏詞受験の時期については、受験が先で、受験に失敗した後、涇州に赴き幕に入り結婚したとする説（馮浩、張采田）もあるが、ここでは黄清士氏の説に従う。
 - (3) 涇州城の東には「善女湫」という沼が数里にわたって広がっていたといい（《太平広記》に見える）：「湫」は池や沼の意。《太平広記》卷四百九十二所収〈靈応伝〉に「涇州之東二十里、有故薛挙城。城之隅有善女湫、広袤数里、兼葭叢翠、古木蕭疎。」とある。なお、《唐詩鑑賞辞典》の原文では「涇州城東有“美女湫”、広袤数里」とするが、改めた。
 - (4) 賈誼：(BC200-BC168) 前漢の政治家であり、文人。賈生、賈太傅と称される。若くして文才を認められ、文帝に取り立てられるが、後に疎まれ左遷される（注（8）参照）。《漢書》卷四十八・賈誼伝に「賈誼、雒陽人也、年十八、以能誦詩書属文称於郡中。…廷尉乃言誼年少、頗通諸家之書。文帝召以為博士。是諸、誼年二十余、最為少。」とある。
 - (5) 王粲：(177-217) 三国・魏の詩人。字は仲宣。山陽高平の人。漢の名家の出身で、はじめ劉表のもとに身を寄せるが重用されず、その後曹操に仕え、官は侍中に至った。建安七子の一人。
 - (6) 王粲が賦を作った：王粲には、望郷の念や心の憂いを詠んだ〈登楼賦〉一首がある（《文選》卷十一所収）。李善注に「盛弘之荊州記曰、当陽县城楼、王仲宣登之而作賦」とあり、劉表を頼って荊州に身を寄せていた時の作とされる（注（9）参照）。
 - (7) 賈誼（賈生）が策を献じ…李商隱と同じくらいの若さであった：王茂元の幕に入ったとされる開成三年（838）、李商隱は二十七歳である。《漢書》賈誼伝（注（4）参照）によれば、賈誼は二十余歳にして文帝に取り立てられたという。また、《三国志》魏書・王粲伝（注（9）参照）に、王粲は十七歳で荊州の劉表のもとに身を寄せたとあり、さらに〈登楼賦〉には「遭紛濁而遷逝兮、漫踰紀以迄今。」とある。「紀」は十二年の意。つまり、戦乱を避けて放浪しているうちに、十二年の歳月が空しく過ぎたという。
 - (8) 賈誼が〈治安策〉を上奏しても漢の文帝に取り上げてもらえなかったのは…という文言があったためである：賈誼は文帝に仕えてから数々の改革を図り、政論を上奏した。〈治安策〉もそのひとつ。《漢書》賈誼伝に「誼数上疏陳政事、多所欲匡建、其大略曰『臣窃惟事勢、可為痛哭者一、可為流涕者二、可為長太息者六、若其它背理而傷道者、難徧以疏挙。…陛下何不壹令臣得孰数之於前、因陳治安之策、試詳択焉…』」とある。だが、これらの改革案は重臣たちに阻まれて採択されず、やがて賈誼自身も文帝にも疎まれ、長沙に左遷される。これについては、同伝に「絳・灌・東陽侯・馮敬之属尽害之、乃毀誼曰『雒陽之人年少初学、専欲擅権、紛乱諸事。』於是天子後亦疏之、不用其議、以誼為長沙王太傅。」と見える。
 - (9) 王粲は戦乱を避けて荊州に赴き、劉表のもとに身を寄せた：《三国志》魏書・卷二十一・王粲伝に「献

帝西遷、祭徙長安。…年十七、司徒辟、詔除黃門侍郎、以西京擾亂、皆不就。乃之荊州依劉表。」とある。「献帝の西遷」とは、後漢末（189～190）に董卓が洛陽を焼き払った後、献帝を擁して強行した長安遷都を指す。

- (10) 范蠡：生卒不詳。春秋時代の政治家。字は少伯。越王・勾踐を補けて呉を破った。のちに越を去り、鴟夷子皮、陶朱公と名乗った。
- (11) 会稽の耻を雪ぐ：会稽山（今の浙江省紹興の南にある）で呉王・夫差に破れた越王・勾踐が、范蠡等の補けによって再起し、呉に勝利したことをいう。
- (12) 范蠡は越王・勾踐を補佐して「会稽の耻を雪ぐ」という目的を果たすと、その後は「扁舟に乗って、江湖に浮かぶ」生活を送ったという（《史記》貨殖列伝に見える）：《史記》卷百二十九に「范蠡既雪会稽之耻、乃喟然而歎曰『計然之策七、越用其五而得意。既已施於国、吾欲用之家。』乃乘扁舟、浮於江湖。」とある。
- (13) 王半山（安石）：(1021-1086) 宋、臨川の人。字は介甫、半山は号。神宗の時に宰相となって、各種の変法をおこなうが、司馬光等保守派の反対にあつて無効となり、罷めて鎮南軍節度使となる。詩文をよくし、唐宋八大家の一人として知られる。
- (14) 王半山（安石）はこの聯を最も高く評価し、細かいところまで味わえば、杜甫の詩の趣が大いに感じられるという：「王半山（安石）最賞此聯、細味之、大有杜意。」
- (15) 恵施が梁の宰相であつたとき…ありえません。」と：《莊子》秋水には「恵子相梁、莊子往見之。或謂恵子曰『莊子来、欲代子相。』於是恵子恐、搜於國中三日三夜。莊子往見之、曰『南方有鳥、其名為鵷鵠、子知之乎。夫鵷鵠、発於南海而飛於北海、非梧桐不止、非練実不食、非醴泉不飲。於是鵷得腐鼠、鵷鵠過之、仰而視之曰、嚇。今子欲以子之梁国而嚇我邪。』」とある。
- (16) 近人の張采田の《玉溪生年譜会箋》によれば、李商隱が博学宏詞の試験に落ちたのは、牛党の横やりが入ったためという：初めに李商隱に目をかけた令狐楚は、牛党（牛僧孺等の派閥）の人物であり、令狐楚の死後、李商隱が庇護を求め娘婿となった王茂元は、その反対党派である李德裕派（李党）の直系の党人であつた。

天涯	天涯
春日在天涯	春日 天涯に在り
天涯日又斜	天涯 日 又た斜めなり
鶯啼如有淚	鶯啼きて 如し涙有らば
為濕最高花	為に ^{うるほ} 濕せ最高の花

李商隱のこの絶句は、楊致軒⁽¹⁾が「詩の内容はきわめて悲しく、詩の言葉はきわめて艶やか（意極悲、語極艶）」⁽²⁾ と言うように、表現方法に特色が見られる。

1

第一句（春日在天涯）は平板な書き出しだが、そこには深い悲しみがひめられている。「春日」は春の季節の美しさを描き、「天涯」は流浪してはるか遠くまで来ていることを喩えている。「春日」「天涯」のふたつをいっしょに使うことによって、穏やかな春の日和と異郷での郷愁とをからみあわせている。

第二句（天涯日又斜）では「頂針法」⁽³⁾ を用いている。第一句の終わりと第二句の始めに「天涯」を重複させ、題の意味をふたたびここに示すのである。しかし、この二つの「天涯」はまったく同じ意味だということではない。前者は一般的な遥かに遠い所をいい、後者はある一つの具体的な遥かに遠い所をいう。この二つの「天涯」が繰り返されることにより、さらにいつまでも続く趣が醸しだされている。「春の日」がすばらしければすばらしいほど、失意のうちにあちこち転々とした末、遠く「天涯」にいる李商隱はますます失望してしまうのである。

「春の日に遠く天涯にいる（春日在天涯）」というだけで、すでに悲しい気分させる。そのうえ「天涯の太陽が傾（天涯日又斜）」くとたたみかけることにより、遠く地の果てで、独り行き、落ちぶれてきすらい歩くというものの悲しい雰囲気により強調されるのである。

「日また斜めなり（日又斜）」というのは、夕方の時間を意味する。つまり一日がまた過ぎようとしているのである。そうなると、華やかで美しい春の景色が、気怠くもの悲しい影に覆われてしまう。花がいろとりどりに咲きほこる春の景色と西に沈む夕陽とが、たとえ互いに照り映えたとしても、間もなく、やがては、薄暗い夕闇にのまれてしまうのである。一日また一日と、春の日もやがては咲き誇った花は散り、寂しく過ぎ去っていつてしまう。素晴らしい時は過ぎるのがはやく、そして咲きほこる花はかならずやしおれてしまう。これらも李商隱の生涯の失意や挫折とぴったりと一致している。

「又」をここに用いたことによって、途方に暮れ疲れはてた嘆き⁽⁴⁾、孤独の寂しさ空しくよるべのない悲しみ、これらをすべて言外に表現しているのである。第一句二句は、美しい物に対していつまでも名残惜しむ気持ちが含まれている。そしてさらに、命あるものは必ずや衰えてしまうことに対す

る悲しみも含んでいる。

2

第三句（鶯啼如有淚）は、言葉の繰り返しや婉曲的な表現を用いており人の目を引き、第四句（為濕最高花）は余韻が長く続き、いつそうもの寂しく人の心を揺さぶる。

「鶯の啼」く声は本来はとても耳に心地よいものである。しかし、この時のこの状況であったために、李商隱には悲しくて泣いているように聞こえたのであった。第三句四句の意味は、

声をあげて啼いている黄鶯よ、もしも君に涙があるのなら、私のために枝のあの一番高いところに咲く花に涙を落としておくれ、

というものである。このように言うのは、「蠟燭が燃え尽き」⁽⁵⁾るように、涙はもう流れてかれはてしてしまったので、ただ啼いている鶯に恨みを託すしかなかったからである。

この詩の、「啼」くといっているのは聴いて感じていること、花を見ていることは目で見て感じていること、「^{うるお}湿」うというのは触って感じていること、私のために一番高いところに咲く花を湿してほしいというのは心に感じることである。これは李商隱の鋭い感覚による想像と深く心に感じたこととを描き出したものである。李商隱は自分の感情を物に託して黄鶯に涙を流させている。その涙により^{うるお}湿された花も、当然、涙のあとがたくさんついていて、いまにもしおれそうなほど悲しげなようすをしているのである。鶯や花の愛らしさは、春の盛りを象徴する景物である。しかし春が過ぎてしまえば、どのみち花はしおれ、鶯は去ってしまうのだ。つまり鶯と花が詩人のために悲しむというのは、まぎれもなく詩人自身が悲しんでいるからなのだ。

味わい深いのは、詩人がなぜこのような「最も高いところにある花」に深い関心を寄せたのかということである。樹のてっぺんに咲く花は、つまり最後まで咲いている花ということなので、春がもう過ぎ、美しい風物ももうすぐ消えてしまい、鶯の啼く声もひとしお悲しげに思えたであろう。また、樹のてっぺんに咲く花は、高いところにあつて、なんの助けもなく、激しい風が吹き突然の大雨にあつたら簡単に折れてしまうだろう。この花の運命と、人の世のすべての美しいものとがたやすく傷つけられてしまうという運命とはなんと似ているのだろう。この花の運命と、才能があり志を抱いていたのに生涯うだつのあがらなかった李商隱の運命とはまたなんと似ているのだろうか。

李商隱の生きた時代、唐王朝はもはや崩壊寸前であった。李商隱は国や自分自身の前途に深く絶望していた。そのために命の短さ、人生の空しさによって、詩に込められた悲しい気分がいつそう重くなっている。李商隱の悲しみは天涯に身を寄せる愁いをはるかに越え、人生の挫折や生命の儚く消えていく苦しみにまで深くしみ込んでいる。このような「韻外の致」⁽⁶⁾は、人を感動させ、しばしば自分を保つことをできなくさせ、その趣の中に溺れて我を忘れさせる。この艶やかでそして寂しい絶句は、春の挽歌であるだけでなく、人生の挽歌であり、さらに李商隱の時代の挽歌でもあるのだ。

宋廓（三枝秀子訳）

-
- (1) 楊致軒：楊守知、清の人。雍正の孫。字は次也。号は致軒。康熙の進士。官は平涼府知。詩に巧。浙西の四才子と称せらる。致軒集を著す。
- (2) 「意極悲、語極艷」：《李商隱集解》、《天涯》集評に【楊曰】「意極悲、語極艷、不可多得」（馮箋引。一作朱彝尊批語。「意極悲」作「言極怨」）とある。
- (3) 頂針法：「頂針」文章法の名。上句の字を下句の頂きに置いて書き始める法。針を環頂に立てれば環は回り易いという意にとる。一名、頂針回環法。
- (4) 途方に暮れ疲れはてた嘆き：原文は「日暮途究、茶然疲役」『莊子』齊物篇に「茶然疲役」とある。
- (5) 「蠟燭が燃え尽き」：李商隱の〈無題詩〉に「蠟炬^{ろうきょ}灰と成りて 涙始めて乾く（蠟炬成灰涙始乾）」の句がある。
- (6) 「韻外の致」：司空図〈與李生論詩書〉に見える。門脇廣文氏の《二十四詩品》（2000年4月、明德出版、182頁）では、「韻外の致」は「具体的な事物を超えた趣」と訳されている。詳細は190頁～191頁の〈解説〉を参照。

（2006年9月21日受理）